

概 要

dyslexia — 読 み 書 き の 困 難 — の 特 徴 を 持 っ た 子
ど も た ち を 、 英 語 の レ ッ ス ン を 通 じ て 、 い か
に 、 「 英 語 っ て 難 し く な い 」 「 も う 、 こ ん な
に 読 め る よ う に な っ た 」 「 英 語 が 書 け る 」 と
い う 感 動 を 与 え 、 楽 に し て あ げ ら れ る か 。

dyslexic で な い 子 ど も と い っ し ょ に 、 同 じ レ ッ
ス ン を 受 け て も 、 自 分 が 特 別 で あ る と 感 じ た
り 、 文 字 へ の 苦 手 意 識 を 持 ち 続 け た ま ま 、 中
学 ・ 高 校 と 進 学 し て い く こ と を 極 力 避 け ら れ
る よ う に す る に は 、 ど う す れ ば い い か 。

フ ォ ニ ッ ク ス や サ イ ト ワ ー ド を 強 化 す る 、
幼 児 期 か ら の フ ォ ネ ミ ッ ク ・ ア ウ エ ア ネ ス を
意 識 し て 行 う こ と を 中 心 に 、 日 々 の レ ッ ス ン
で 取 り 入 れ て き た こ と を 考 察 し た 。

ま た 、 dyslexia の み な ら ず 、 学 習 に 困 難 を 持 っ
て い る 様 々 な 子 ど も た ち へ 、 一 民 間 の 英 語 教
室 と し て 何 が で き る の か 、 今 後 の 展 望 も 考 え
た 。

十 川 泰 子

フ ェ リ ス 女 学 院 大 学 英 文 科 卒 業

King George International College (カナダ) にて、TESOL

(他言語話者への英語教授法)、TESOL for children の

ディプロマを取得

英会話スクールに講師として勤務後、mpiセミ

ナーを受講、自宅にてリトルカナダ英語教室

を開業

目次

1 . Dyslexia とは

2 . 英語教室における dyslexic な子ども

3 . フォニックス指導

4 . サイトワード指導

5 . 絵のように文字をイメージ化

6 . 音読指導

7 . 幼児期からの指導の効果

8 . 今後の展望

1 . Dyslexia とは

はじめに

Dyslexia について勉強するきっかけを与えてくれたのは、すでに教室を巣立っていったあの生徒であった。以来、英語を教える先生というよりは、子どもたちに関わっているひとりの大人の責任として、自分なりの取り組み方を模索中である。dyslexiaそのものは治らない。しかし、まず、それがどういうものかを知ることに、週に1回という短い時間でも、教室で接している子どもたちの中に、dyslexiaの傾向がある子がいることに気づくこと。そこから始めて、少しでも彼らの読み書きの困難を楽にしてあげられることができればと、発達途上ながら、レッスンでの工夫を試みている。

Dyslexia とは

International Dyslexia Association および National Institute of Child

Health and Human Development による定義 (2002)
ディスレクシアはその原因が脳神経機構に起因する、特異的学習障害の一つである。その特徴には、文字を綴ること・読むこと、正確かつ流暢にことばを認識することが苦手であることなどがあげられる。これは、効果的な教育を受けているのにも関わらず、本人の認知能力から予想されるレベルの読み書きを獲得するのが困難である状態であり、その原因は言語能力の音韻を司る部門に問題があることが多い。二次的障害として、読解困難や、読む経験が乏しくなることにより語彙力・背景知識の発達に問題が生じると考えられている。(国際発達性ディスレクシア講演会
Lectures on Dyslexia 2010年6月27日(日) 横浜市開校記念会館ホールにて、配布資料に掲載の「ディスレクシア基本用語の理解—日本LD学会ディスレクシアワーキンググループ」より)

2 . 英 語 教 室 に お け る dyslexic な 子 ど も

「この子はdyslexiaの傾向がある」「こういうところは、dyslexicだな」と、早期に気づいてあげることがまず、第一であるが、私たちは医師ではないので、dyslexiaであると決めつけてはいけない。また、もし、私たちが、医師のよ
うな専門家であったとしても、診断することそのものには、何の意味もないと思う。言語教育に携わる者として、「治そう」ではなく、「楽にしてあげたい」と考え、そのための方法を考えるべきなのである。

では、「dyslexicである」と、思われるのはどのような傾向なのか。

例えば、学校でローマ字を学習済であるのに、アルファベットの文字の形を覚えられない、順番さえあやしいような場合。小学中学年以上であれば、何度か見れば丸暗記できそうな単語、dog、cat、なども、読めたとしても、スペルを覚えて書くのが難しい。

小学 1、2 年生の場合は、絵カードはよく理解し、すぐに言えるようになるが、同じ内容の文字カードでは、毎回繰り返してやっても、言える語が増えていかない。

文字に触れる最初の段階の幼児期では、小学校入学前くらいになると、自分の名前を、見本を見て書き写すことをさせてみる。dyslexicでない子どもの場合は、数回で名前の書き方を覚え、また、忘れることがあっても、見本を提示されれば、上手下手はあれ、その通り写すことができる。しかし、dyslexicな子どもにおいては、文字の形を真似して書いてみる、ということが困難である。

また、年齢を問わず、b と d に代表される、いわゆる鏡文字が、高学年生、あるいは、中学生になってもあり、左右の向きが混乱するのと同時に、それぞれの音の識別も難しいようである。

中学生においては、一見よく似ているもの
— teach, teaches, teacher / study, student, subject など — の綴り

を区別するのが難しく、また、それぞれの意味も混同している場合がある。different / difficult など、読みを間違っ てインプットしてしま うと、何度訂正しても、最初に間違えた読み方をしてしまう。この場合は、文中での意味は理解できていることが多い。

日本語を書かせると、文字が年齢の割にとっても大きく、拙い。日本語の dyslexia は、漢字の読み書きに困難があるだけでなく、漢字はできるが、ひらがなが苦手、ひらがなはできるが、カタカナができない、と様々であるが、多く見られるのは、文中に漢字がほとんどなく、「わたし」「せんせい」「がっこう」などもひらがなで書いている場合である。これは、中学生になると、漢字を書くのが面倒で、書けるのに書かないという子どももいるため、見極める必要がある。

宿題や学校のテストで、手をつけていない問題があったとき、その問題文（英文）を教師が読んであげると、問題文の意味がわか

り、答えられることがある。口頭では理解できるレベルのことが、文字になり、読まなければ解けない問題になったとき、困難を生じているのである。

3. フォニックス指導

dyslexic な子どもには、フォニックスを学ばせることが有効だと言われている。

フォニックスは、アルファベットの文字と音の関係のルールであり、日本語では、ひらがなの読み方＝音を習得すれば、書かれたものを読めるようになるわけであるが、英語の場合は、アルファベットには、名前と音があり、アルファベット 26 文字の名前が言えても、単語が読めることにはつながらないのである。

フォニックスのしくみを考えたとき、フォニックスルールを知ることにより、読み書き

に困難を持つ子どもに、ひとつのわかりやすい道筋をつけてあげられることは明らかで、約10%の子どもにdyslexiaの傾向が現れるといわれる英語圏のイギリスなどでも、読みの指導方法として、フォニックスがあらためて見直されていると聞く。

しかし、実際にdyslexicな子どもにフォニックス指導をしていると、フォニックスが、dyslexiaの子どもにとって、the best one あるいは、the only one であるとはまでは言えないのではないかと、という疑問が湧いてくる。

まず、第一には、dyslexicな子どもの多くが、短期記憶に問題がある。フォニックスとはルールの学習であり、決まり事を覚えていかなければいけない。短期記憶に問題がある子どもの場合、ルールそのものが覚えられないのである。

レッスンで、フォニックスの1文字1音を習うとしよう。絵カードを見せ、先生やクラスメイトといっしょに読む。文字カードも同

様に習う。TPR (total physical response — 教師の言うことを聞いて、からだで反応する。幼児の言語習得のしくみを元に考えられたアプローチ法)として、感覚に訴えかける方法でさらに定着を図る。

年齢によって、定着の進度は様々だが、数回のレッスンと、小学生の場合は、数回の宿題も含め、おおよそ、アルファベット26文字それぞれの音と、それで始まる単語(キーワード)を少なくとも一つ、場合によっては、数个覚えているものである。

dyslexic な子どもでも、レッスン中には、他の子どもたちとさほど遜色なく、フォニックス学習の活動ができるが、翌週、前回の復習として、カードの読みなどの基本をさせると、ほとんど忘れていくことがある。教師やクラスメイトが読む、言うのを聞けば、思い出せるのであるが、こうしたことを繰り返して、26文字すべてを定着するのに、相当な時間を要する。

また、読みが定着したのち、書くことで
reproductionを試みる時、dyslexicな子どもたちには、読みよりもさらに困難を感じる子がいる。
例えば、word hunt（ホワイトボードに最初の文字を書いて指定し、それで始まる語を書く。ペアやグループで競わせる）や、年齢、レベルが上がると、words out of（母音はすべて使うが、子音はいくつかを抜かしたものを指定し、それらのみで作られる単語を書かせる）、word chain（単語のしりとり。最後の文字で始まるものから次を始める。時間制限をするとより活発な活動になる）などである。また、初心者、あるいは、年齢の低い子どもには、書く前段階の簡単なやり方として、アルファベットカードを使い、単語カードを見せて、それを作らせる、または、レベルが進んでいれば、コピーではなく、聞いた単語を作らせることもできる。
これらの活動において、dyslexicな子どもは、

音を文字に表出することが非常に困難である。また、フォニックスルールを無視しても、単語をそのまま覚える子どももいるわけだが、dyslexicな子どもは、丸暗記も苦手なため、それもできないことが多い。いちばん簡単そうに思える、見せられたカードの文字を、アルファベットカードでそのまま真似して並べる、ということさえ、いくつかの似た文字を混同したり、たった26枚のカードからでも、1文字を探し出すのに時間がかかる。

似た文字の混同としては、b/d、p/q、h/n、また、大文字のlと小文字のlを、カードは小文字のみで、大文字があるはずがないと知っていても間違えることもある。

フォニックス指導に関しては、dyslexicな子どもにおいても、そうでない子どもにおいても、いうまでもなく、1文字1音が、すべての基本である。私の教室では、3歳から5歳の予備入学的なクラスにおいては、後に述べ

る フォネミック・アウエアネスに基づき、英語の音をとらえること、後半では、その音を表している文字にも気づくことを目標とし、幼稚園年長の1年間で、1文字1音のフォニックスアルファベットを習得することを基準としている。ただ、これは、年長以前に入学することを前提としており、1年生で入ってくる子どもいれば、3年生、4年生と年齢が進んでから、初めて英語を本格的に習うという子ども来る。途中入学でも、例えば、4年生を年長と同じクラスにするわけにはいかない。そこで、数回、別に通ってもらったり、保護者に説明して、フォニックスアルファベットを自習してきてもらい、時間外でその宿題を見る、といった補足的な手当てをしているのだが、低学年生までに、1文字1音を定着できていない場合、ここの徹底の薄さが、その後の読み書きの差に出てくることがある。

フォニックスの場合、1文字1音の次に重要なのは magic E あるいは、silent E と呼ばれる、

cake、bikeなどに代表される、最後がeになる
と、その前の母音がアルファベットの名前読
みになるというものである。

dyslexicでない子どもでも、magic Eのルールに戸
惑う子は少なからずいる。roseやnoseはわかるの
だが、a、e、iのmagic Eに関しては、フォニ
ックスアルファベットと混同するのである。

ただ、この子どもたちは、cakeのように、よく
目にし、また、好きなものであれば、そのま
ま覚えるので、cakeを基本に考えさせれば、
徐々にこのルールがわかってくる。

dyslexicな子どもにおいても、フォニックスア
ルファベットを一通りやったら、はやめに
magic Eを紹介し、ルールを前面に出すよりも、
絵や実物、記憶に残りそうな話など、印象付
けられるものを上手に使用し、様々な方面か
ら覚えられるきっかけを与え続けていくこと
が重要である。

フォニックスがベストな方法ではないかも
しれない、と思われるからといって、他に、

「これが！」という決定的な方法があるわけ
ではないが、国内の専門機関において、日本
語に関しては、様々な方法が試みられてい
る。

例えば、dyslexiaの傾向がある子どもへの文字
の定着としては、multi-sensory methodという、五感に
訴えかけて、文字を覚えさせる方法も提唱さ
れている。粘土で文字の形を作らせたり、サ
ンドペーパーを文字の形に切り抜いたものを
触ることで、ただ、見て、聞いて覚えようと
するよりも、効果が上がるというものであ
る。

dyslexicな子どもも、そうでない子どもも同時
に存在する英語教室において、限られた時間
の中で、安全に、簡単に、清潔にできること
たとえば、サンドペーパーの代わりに、10
0円ショップなどでも市販されている滑り止
めマットを使う方法もある。これは、突起が
あり、また、パステル系で色もきれいなた
め、年齢の小さい子どもにも興味を持たせら

れる。アルファベットの形に切り抜き、触って形を感じる事ができる。また、dyslexicでない子どもにも、目を閉じて、何のアルファベットであるか、当てさせる活動に使える。

また、印象的なキーワードという点では、子どもたちが興味のあることに関連した単語を、各フォニックスアルファベットのキーワードにするのも効果的である。例えば、剣道をやっている子には、kのキーワードはkendo、ポケモンが大好きなら、pのキーワードは、Pokemon。kingやpigの他にもあるよ、ということを示してあげるだけでも、文字と音を一致しやすいのではないか。

フォニックスは必ず、取り入れるべきものであるが、と同時に、dyslexiaの傾向は、子どもひとりひとりにおいて、読みが難しい、読めるけど書けない、記憶に留めるのが困難だ、また、それらの組み合わせが様々になる、というように、異なるものであるから、ひとりひとりに合わせた補助的な学習が必要であ

る。これには、次に述べるサイトワードの学習も大きな役割を持つ。

4. サイトワード指導

フォニックスの1文字1音がほぼ定着し、magic E も入り始めたら、サイトワードも意識させることは、dyslexic な子どものみならず、そうではない子どもにとっても、有効であると思われる。

子どもによっては、フォニックスルールを習いながらも、例外もたくさんあることに自ら気づき、自分の力で、フォニックスワードもサイトワードも読めるようになっていく子どもと、一度入ったルールから、柔軟に離れることができず、フォニックス読みをすべてに当てはめようとし、読みに支障が出てくる子どもがいる。

例えば、find を「フィンド」と読み、「ファ

インド」と読むのであれば、magic E であるべきではないのか、と悩むというようなことである。child と children など、多読を奨励し、レッスンで本読みの時間を設けている以上、ルール外で覚えるしかないサイトワードとして、早めに取り上げたい語である。

レッスンでは、mpi の BB シリーズや oxford の reading tree など、graded readers、あるいは、フォニックスリーダーズと呼ばれるものを、レベルに合わせて読んでいる。宿題には、これらの CD つきのものや、mpi の CD つき絵本シリーズを活用している。

実際の子どもたちのサイトワードの覚えは、よく登場する語 — said, the, they など — は、2, 3 回の本読みレッスンで覚えられる。これは、dyslexic である子もそうでない子もあまり差がない。said などは、書き写しではなく、聞いたままを自分で書きなさいと言われたら、おそらく、sed とする子が多いと思われるが、読みに関しては、文中での意味と同時に違和

感なく覚えられる。読み（読書）の指導に関

しては、後にまた述べたいと思う。

リーダー以外では、補助的に、市販されて

いるサイトワードカードを使用する。意味が

わかるもの、読めるもの、読めないもの、初

めて見るものが混同していてよいので、ま

ず、自分たちで読ませてみる。putを「パッ

ト」と読んだり、allを「アール」と言ったり

するが、ひとつずつ、直していけば、次に本

読みで出てきたときに、「アールだと思って

いたけど、違ったよね。たしか・・・オール

だ」と、自分で気づけるようになる。そこか

ら発展して、tallが出てきて、読み方に戸惑っ

ていれば、tを隠してやると、残りが「オー

ル」だということを見出し、tの音と組み合

わせて読むことができる。

意味に関しては、読みを覚えてからでもよ

いのではないかと思う。こうしたカードの裏

面には例文が載っており、それを使用しても

よいが、日本人の子どもには、「？」なもの

もある。その場合は、より身近で簡単な例文を与えてやるか、子どもたちの力次第では、例文を作らせてみるとよい。dyslexic な子どもにとっても、文を書かせずに、口頭で作らせることなら、負担を感じずにできる。

カードは、カルタ取りやスピードリレーディング、陣取りゲームなどの活動で、レッスンの始まり、または、最後に数分、時間が余ったときなどにも、extra activity として使える。その際、dyslexic な子どもは、絵カードではない、文字だけのカードに、拒否反応がある場合も考えられるので、ペアやチーム分けを工夫する、担当させる（読ませる）カード群を簡単なものにする、などの配慮が必要である。

中学生で、dyslexic だと思われる子どもには、市販のカードよりも、教師が自ら、その子どもが必要としている語彙のカードを作り、1年生であれば、小学生クラスで親しんだゲーム形式で行ってもよい。学年と各子どもの精神的な成長を考慮し、あまり、子どもじみた

やり方ではなく、中学生らしい、知的好奇心に訴えるようなやり方を提供してあげたい。彼らは、文字の読み書きは不得意であるが、勉強ができないわけではない。そして、この子どもたちの特徴として、「性格がよく、非常に努力家だ」ということが言われている。「なぜ、自分は覚えられないのだろう」と、毎日、何時間もかけて、学校や塾の宿題をしているのである。彼らの自尊心を傷つけないような配慮は、特に、中学生以上になると大変重要だと思われる。

それから、もうひとつ、中学生には、発音記号を教えることも、語彙の読みを強化するひとつのルールとして考えられる。学校により、状況は異なると思うが、中学校では、以前のように、発音記号を覚えさせる、ということをしていないようである。しかしせっかく、教科書にも載せているのであるから、読みのヒントとして、生徒個別に読みづらそうなものを抜き出して、発音記号を教えると、

徐々に、自分で読めるソフトウェアが増えて
いる。ネイティブスピーカーの教師の中に
は、発音記号は教えてはいけない、正しい発
音を教えればいい、という人もいるが、
non-native である私たちには、ルールで示された
方がわかりやすい、ということがある。日本
の現状にあったやり方を考えてあげたいもの
である。

5. 絵のように文字をイメージ化

dyslexic な子どもは、3Dの世界に強いと言われ
ている。小さいころから、文字の読み書きが
苦手で、学校で大変な苦勞をしたが、イギリ
スへ留学し、教師から、dyslexia だと言われ、苦
手なことを無理して習得しようとするより
も、得意なことを伸ばす教育を受け、建築家
になった日本人もいる。アインシュタイン
や、古くは、レオナルド・ダ・ビンチも dyslexia

であったのではないかと、言われている。また、俳優のトム・クルーズは、自ら dyslexia であると公表しており、台本が読めないため、台詞を覚えるときは、担当者が読んで録音したものを聞いて覚えているそうである。このように、dyslexia であっても、好きなこと、得意なことで、特に、芸術面で才能を開花させている人がたくさんいることを、機会があれば、読み書きの苦手な子どもたちに知らせてあげたいものである。

単語のスペルを覚える際に、音と文字の結合が難しいのであれば、視覚に訴える方法がある。

年齢が低い子どもへの絵を使った文字のイメージ化としては、mpi の Songs & Chants 1 の本に掲載されている「アルファベットの歌」の絵が参考になる。特に、子どもにとって親しみのあがる動物で、octopus の o や、zebra の z などは、アルファベットの形が印象に残りやすい好例である。他にも、からだでアルファベットの形

を作るのも年齢の低い子どもには効果的である。それを、「1週間の歌」のように、歌のふりつけに応用する方法もある。この歌の中で、Thursdayのthを表すために、舌を上下の歯ではさむジェスチャーをするが、これは、子どもに大変受けがよく、レッスンに活気が生まれると同時に、小さい年齢のうちに、この、日本語にはないthの発音の仕方が自然に身につくのである。th音の出し方のお手本として、歯科医が使用する歯の模型に、ピンクのフェルトで作った舌を合わせたものを使うこともあるが、Thursdayのジェスチャーに比べると、自らからだで覚える、ということでは、「1週間の歌」にはかなわない。

th音に関しては、3歳の頃から教室に通ってきている、現在小学2年生の子どもは、「1週間の歌」だけで、th音を習得し、今では、本読みの宿題として出しているレポートを読むときなどにも、thが見事に発音できている。

学習歴数年の小学生へのスペリング活動として、quick look & write と呼んでいる、すばやく単語カードを見せて、目で記憶させ、ノートか、マーカーで書けるボードに写させるやり方がある。子どもたちからの “ One more time, please. ” は、基本的に3回までとし、3回見るうちに書けなくても、次へ進む。後で、すべての語を復習し、自分で直させる。レベル、文字数によっては、1回しか見せない、とするのも効果的である。

また、go around と呼んでいるものは、ホワイトボードの裏面に、あらかじめ、センテンスを書いた紙を貼っておき、子どもたちをホワイトボードの裏側を立ち止まらずに通過させ、歩きながら見て、覚えた分だけ、自分の席に戻って書き写し、また、ホワイトボードを回り、見て帰って書く、というものである。回数か時間を制限してもよいし、センテンスは既習のものでも、その応用でも、また、子どもたちの力次第では、これから習う

ものの予習になってもよい。

他に、ホワイトボードを使用した書き取りの方法としては、教師がセンテンスを書いている間はまだ書き始めてはいけないこととし、書き終わるとすぐに、大きい紙か布で隠す。ある進学塾では、教室の天井からロールカーテンが引き下ろせるようになっていたが、私の教室では、大きい洗たくばさみで留めた布を裏側へめくっておき、それを即座に下ろし、カバーにしている。子どもたちは、目で見た記憶と、読んで覚えている音の記憶を頼りに、文を完成させていく。これは、集中力を養うのにも役立つ。

また、新しい語彙の導入として、絵カードを、少しずつ、あるいは一部分だけ見せて、何であるか想像させる、gradually revealing という方法があるが、これは、文字カードにも使える。一部分だけから、単語の全容を想像すること、後で正解を見たときに、見えていなかった文字がイメージに残りやすい。

こうした、文字のイメージ化に際しては、
dyslexic な子どもには、ふつうの本のように、行
間が詰まっているものを読む（見る）のは、
大変な労力を要することがあるということ
を忘れてはならない。彼らには、まっすぐに書
かれた、あるいは、印刷されている文字や文
が歪んで見えるのである。その歪み方という
のは、千差万別らしく、本人でないとわから
ない。よって、スペリング活動に使われる文
字も、大きく、見やすいものでなければなら
ないし、一度にたくさん行を見せることは
しないで、1文ずつ提供するべきである。こ
れは、読み（音読）でも同様である。教科書
を読みやすくする方法のひとつとしてよく言
われるのが、定規ほどの幅、長さの厚紙の中
央をちょうど一行文の幅だけくりぬき、その
紙を当てて、今、読んでいる行だけが見える
ようにする、というものである。また、色つ
きのプラスチックシートをページ全体に当
てることで、そのまま読むよりも、文字が見

やすくなる、ということもあるそうだ。何色が見えやすいかは、個人で異なり、ブルーという人もいれば、オレンジがよいという説もある。

また、dyslexicであるかどうかに関わらず、小学生の場合は、スペルミスや書き方のルールの間違い（文頭は大文字、ピリオドなどを忘れない、など）も、年齢、学習歴、性格などの諸状況を考慮し、すべてを直す必要はない。その個所を黙って指示してやるだけでも、子どもたちは間違いに自ら気づけるものである。

読み書きの苦手な、あるいは、文字に抵抗がある中学生へのスペリング指導としては、個別の対応が望ましい。口頭では発音も意味もよくわかっているのに、スペリングができない、小学生クラスでフォニックスを習ってきたのに、ローマ字のように書いてしまう、意味の記憶も難しい、など、dyslexicな傾向の現れ方が様々であるからだ。また、学校のテス

トでは、スペルの間違いは大目に見てもらえないものであるから、よく理解できているのに、書けないというだけで、点数が下がり、motivation を下げてしまうことになりかねない。

新出語彙をノートに書きだし、日本語の意味を調べて書き、5回ずつスペルを練習してくる、という宿題を出すと、1つ目は間違わず、コピーできているが、2つ目で、写し間違い、3つ目から最後まで、間違えている2つ目を書き写している、ということもあった。そこで、他の活動をさせている間に、ノートを預かり、1つ目を教師が大きくきれいに書いておく。小さく切った厚紙を与え、1つ目を目で覚えたと思ったら、その紙で隠し、2つ目を書く。また、隠して書く。最後に全部、1つ目と同じかどうか確認する。という方法をさせている。

回数より正確さが大事で、1度に書かせる量は少なめにし、時間をおいて、同じ語彙を、ワークシート（日本語→英語、unscramble —

文字の並べ替え、間違い探し、など) や、ディクテーションなどの活動で、繰り返し思い出させるようにする。

また、口頭言語では、日本語も英語もよくでき、文法も、語彙の意味もよく定着している中学生でも、スペルが苦手な子がいる。読みに関しては、fluentlyとはいかないが、フォニックス的にはよく読め、また、長いストーリーや記事でも、内容が1度の読みで理解できている。ローマ字的に、oneをオネと読むようなやり方で、サイトワードのスペルを覚えていても、実際に英語を読むときには、オネと読むわけではない。学習能力が高く、学年が進み、語彙が増えてくれば、dyslexicな傾向がかなり弱まってくるのではないか、と思われる場合は、負担の少ないやり方を認めている。

いずれの場合も、dyslexiaの傾向があるがゆえに学習に困難を来たしているのか、全体的な認知能力が低いための場合は、見極めなければならぬ。知的レベルが年齢相応であるの

に、読み書きだけ苦手な子どもは、ふだんの言動から、年齢なりの常識があるかどうか、ゲームのやり方などが理解できるか、英語で算数をさせてみる、ストーリーや状況設定を口頭で聞いて、把握できているかどうか、等で判断できる。

6. 音読指導

フォニックス指導へ入る前段階として、文字抜きで、音素を聞き分けるフォネミック・アウエアネスを意識して、レッスンに取り入れていきたい。

使用するチャンツや歌は、リズム、メロディと歌詞も、覚えやすく簡単で、繰り返しがあり、押韻している語が入っているものが望ましい。また、振り付けやジェスチャーが複雑になると、それをすることに気を取られ、歌えていない、口が開いていない子が出てく

るため、シンプルを心がけたい。

重要なのは、ただ、上手にリズムに乗れたり、歌えたりするかどうかよりも、ライミング（押韻）に気付いているか、強勢や発音を正確にとらえられているか、ということである。そのためには、歌えるようになってきたら、絵を見ながら、歌に出てくる語彙を言ってみる、その語彙の音と同じ音の一部を持つものを思い出させてみる、といった、歌前後の活動も必要である。日本人の子どもには、少しハードルが高いが、'Down by the Bay' が歌えるようになったら、自分たちで、ライミングになる語を考え、入れ替えて歌えるようになると、フォネミック・アウエアネス的指導も完成かと思われる。実際、この歌は、トロントのモンテッソーリのプリスクールで実習をしたとき、私たち外国人実習生が四苦八苦している中、現地の子どもたちは、次々にアイデアを出し合っていた。

フォネミック・アウエアネスを意識すると

同時に、音読への準備をしていく。5歳まで

は読み聞かせが中心で、話の内容や、語彙の

音が面白いものなどは、リピートもさせる。

学習歴にもよるが、年長から小学1年生で

は、毎回、1冊、まず教師が読み、全体のリ

ピート読み、ひとりリピート読みをする。こ

の年齢では、センテンスの読みの accuracy（正確

さ）にはこだわらず、リズムや強勢を重視

し、また、初めての話であれば、わかりやす

い内容か、楽しめるツボがあるか、というこ

とも考慮する。'The Three Little Pigs' のように、

「三匹の子ぶた」として、すでにストーリー

を知っているものなら、少々、言い回しが難

しくても、取り入れられる。

また、年長～小学生の全クラスで、本読み

レッスンの日进行、その日は、レベル別リ

ーダーなどを読み、レポートを書いてもら

う。この最初のレベルでは、絵とタイトル、

作者名、できればキーワードを書くというも

のだ。

次のレベルになると、このレポートは宿題になる。絵のスペースが小さくなり、文の書き写しをする。3、4年生以上くらいで、絵がなくなり、文だけを書き写す。翌週、宿題チェックで、ひとりずつ、書き写してきた文を読む。CDつきであれば、聞いた回数を書く。回数が少なくても、自分で読めるようになっていればよいが、何十回と聞いてきても、書いたものを読めなければ、これは、読めるようになる練習だということを、本人と保護者に再度、伝えることもある。

小学生への宿題用の本、幼児への貸し出し本の選定は、初めは教師が行い、CDつきのものを渡す。幼児でも、学習歴によっては、自分で選ばせるが、同じものだけを繰り返し選ぶ場合や、絵が気に入ったからというだけで持ち帰り、まったく見た、聞いた様子がない、ということは、観察していれば、わかるので、ときどき、教師側で、ページ数が少なく、見る気になりそうなもの、保護者もいっ

しよにできそうなものを選びなおしてやる。

小学生も、基本的には同様で、ある時期、好きなものを繰り返し、覚えるまで読むのはいいが、偏りが激しい時は、違うものも勧めてみるか、宿題はこれ、と、クラス全員にあらかじめ決めたものを渡すこともある。

本のレベル設定に関しては、各社、グレーディングがまちまちであり、また、語数だけでなく、語彙の難易度、内容や文字の大きさ、絵の雰囲気も含め、どのクラスに、どの子どもに適しているかを判断するべきと考えるので、本来のグレードとは前後することもあるが、教室オリジナルのレベル設定をしている。

さて、dyslexic な子どもへの本読みの指導であるが、この子どもたちの特徴として、fluency（流暢さ）が大きく欠如することが多い。小学生のうちには、英語の読み、そのものにまだ不慣れなため、dyslexic でない子どもでも、語と語の流れを断ち切るように、訥々と読む子どもも

いるが、中学生になっても同様で、しかも、独特のリズムや強勢で読む場合は、その傾向があると考えられる。

小学生時代に、dyslexicであると思われるのなら、できるだけ、読みを楽にしておいてあげたい。一語ずつの読みに関しては、先に述べた、フォニックスやサイトワードの指導になるが、本を読む、ということは、上手に読める（音読）かどうか、ということと、内容がわかっているのか、ということも教師は把握していかなければいけない。

内容の確認には、レベル別リーダー用のワークシートが販売されている場合もあるし、教師が作ることもできる。学年が小さいうちは、口頭で、キーセンテンスの語彙を入れ替えた文を作らせてみたり、トピックから発展させた活動を行うこともできるが、学年が進めば、是非、書くことを、読みの後でさせて、定着を図りたい。

また、語順というのは、日本語と英語の違い

いという点では、非常に大きいので、これに小学生のうちから、気づかせる、ということからも、キーセンテンスの単語カードを作り、それを並べ替えさせ、正しい文をいくつか作る、という活動も行う。作って終わり、ではなく、ノートに書いたり、ストーリーの順番に合わせて、文を並べ替えたり、ということをさせる。dyslexic な子どもと読み書きが得意な子どもが混在する場合は、ペアで活動させたり、教師が、さりげなく、カードを読みながら渡してやって、読み方を思い出させたり、といった配慮をしたい。また、読みの時間だけではないが、同じクラスの中で、個人の活動で、力の差がある場合、早く終わった子どもにも、そして、待たせている、と感じながら、あせっている子どもにもよくないため、例えば、ノートに書くことが終わっている子どもには、自分で本を選んで、読んでいるように指示する、絵辞典から、その日に習ったフォニックスのキーワードを探させる、

など、短時間ででき、途中でやめさせやすい
ことを与えておくことも必要である。

小学生に音読指導をしていて感じるのは、
dyslexicかそうでないかに関わらず、一番最初に
読むときが、一番上手である。つまり、彼ら
は、繰り返しを好まない。例外として、先に
述べたように、特に、小さい年齢では、同じ
本を繰り返し持ち帰り、まだ、文字が読めな
いののに、すっかり覚えてくる子もいる。もち
ろん、小学生にも、これが課題だ、と1冊の
絵本を与え、参観日にママに見てもらおう、と
いえば、何度でも練習し、それにより、英語
のリズム、美しい発音を習得できる。

ただ、1回のレッスンで、何度も同じパタ
ーンで読ませよう、とすると、もうわかって
いる、もう読める、と興味を失い、読みの精
度がむしろ下がることもある。そこで、最初
にタイトルと表紙から、どんな話が想像させ
る。それから、まずは、教師の読みを全員で
リピートさせ、次に、レベル次第で、ひとり

ずつリピートするか、リピートでなく、自分で読ませる。本からいったん離れ、先に述べたような活動をした後で、最後の1回、として、自分たちで読んでもらう。

dyslexic な子どもも、その状態によるが、このやり方で、教師や友達から助けてもらいながら、同じように音読している。シリーズもののリーダーなどでは、同じ登場人物が出てきて、子どもたちは、すぐに名前を覚えられ、同じ語彙が繰り返し使われていて親しみやすいことも多い。しかし、dyslexic な子どもにおいてはそれらを記憶に留めておくことが苦手である。次回、また、1からの取り組みになることもあるが、彼らは、音読が下手でも、本が好きだったり、日本語でどんな話だったか言ってみて、と言われれば、よく内容を追えているのである。

dyslexic な子どもにだけでなく、小学校高学年、もしくは、中学生になれば、音読から黙読へ切り替えていくことも考えていかなければ

ば い け な い の で は な い だ ろ う か 。

正 確 に 音 読 し よ う 、 と す る あ ま り 、 発 音 に
気 を 取 ら れ 、 内 容 把 握 が お ろ そ か に な る こ と
が 考 え ら れ る 。 音 読 だ け が 身 に つ い て し ま う
と 、 黙 読 と 言 わ れ て も 、 心 の 中 で 、 常 に 文 字
を 音 に 変 換 し な が ら 読 ん で し ま う 。 何 が 弊 害
か と 言 う と 、 音 読 は 黙 読 よ り 時 間 が か か る 。
小 学 生 の う ち は 、 音 読 す る こ と に 大 き な 意
味 、 メ リ ッ ト が あ る と 思 う が 、 中 学 生 に な る
と 、 試 験 問 題 を 早 く 読 む 、 と い う こ と が 必 要
に な っ て く る 。

長 文 を 読 ん で 、 設 問 に 答 え る 。 そ の 場 合 、
す べ て 上 手 に 読 め て い る か ど う か は 問 題 で は
な く 、 設 問 の 答 を 探 し て こ ら れ る か ど う か 、
が 重 要 な の で あ る 。 そ れ は そ れ で 、 中 学 生 に
な れ ば 、 試 験 用 の 読 み 方 を す れ ば い い 、 と 思
わ れ る か も し れ な い が 、 一 度 、 何 も か も 声 に
出 し て 読 む 、 心 の 中 で も 声 で 読 む 、 と い う こ
と が 定 着 す る と 、 本 当 の 意 味 で の 黙 読 が で き
な い 。

dyslexic な子どもは、文字を音に変換するのが
苦手なわけであるから、場合によっては、音
読を強制せず、設問に答えられたかどうかを
重視してやり、別の達成感を感じられるよう
にしたい。

音読から黙読への転換期は、中学生になる
頃がよいかと思われるが、読みの得意な子に
は、もっと早くから、黙読の習慣もつけさせ
たい。本読みレッスンの日以外でも、時間が
あるときには、好きな本を選んで、各自、自
分で読むことをやる。教師としては、音読す
ることで、読めているかどうかの確認ができ
るわけであるが、選んだ本の語彙が90%く
らいは読めるレベルに達していると思われる
子どもには、こうした、自分読みの時間
には、黙読をさせていきたい。

7. 幼児期からの指導の効果

dyslexia は 遺 伝 性 で あ る 。 ど ち ら か の 親 が そ う
で あ れ ば 、 5 0 % 、 両 親 で あ れ ば 、 8 0 % の
確 率 で 現 れ る と 言 わ れ て い る 。

英 語 教 室 に 入 学 し て く る き ょ う だ い を 観 察
し て い る と 、 学 習 能 力 に 差 が あ る よ う な 場 合
で も 、 dyslexic な 傾 向 が ひ と り に あ れ ば 、 き ょ う
だ い に も 同 様 の こ と が 見 受 け ら れ る 場 合 が 多
い こ と に 気 づ く で あ ろ う 。

た と え ば 、 同 時 に 英 語 教 室 に 入 学 し て き た
姉 妹 に dyslexic な 傾 向 が 見 え る と し ょ う 。 年 齢
は 、 仮 に 、 姉 が 小 学 3 年 生 、 妹 が 5 歳 。

妹 へ の 読 み 書 き 指 導 と し て は 、 前 述 の よ う
に 、 歌 や チ ャ ン ツ で リ ズ ム 、 音 を 入 れ る こ と
を 重 視 す る と 同 時 に 、 1 文 字 1 音 を 徹 底 す
る 。 年 長 に な る と 、 ひ ら が な を 覚 え 始 め る
が 、 鏡 文 字 が 見 受 け ら れ る 。 ア ル フ ァ ベ ッ ト
で も 同 様 で 、 b-d は も ち ろ ん 、 大 文 字 の l と 小
文 字 の l を よ く 間 違 え る 。 b-d ペ ア に 関 し て
は 、 そ れ ぞ れ の キ ー ワ ー ド を 明 確 に し 、 文 字
を 読 み 間 違 う 、 書 き 間 違 う 都 度 、 キ ー ワ ー ド

を思い出させ、音を再確認する。また、bedの絵を描き、その絵にbedの文字を乗せる。bとdの向きの違いがわからなくなったら、bedの絵を思い出すように教える。

小学生になるまでは、レッスンの最後の時間を使って、絵と文字両方が書かれたカードの文字を、ホワイトボードに自由にコピーすることさせる。間違っている場合でも直さず、リラックスした雰囲気の中で、小さい子どもたちはのびのびと書く。penguinsのような長いものもあるが、スペルを覚えるために書いているわけでも、1文字1音のフォニックスで、習った語彙を書けるようになるためでもなく、文字、そのものに親しむこと、書ける、難しくないという意識を持つことを重視する。

結果、小学4年生くらいになると、他の活動に比べて、書くことは苦手だ、という認識はあっても、文字への抵抗はなくなる。早い年齢から始めた分、耳ができており、発音

も、強弱のある、英語らしい言い方、読み方ができる。

一方で、3年生から始めた姉は、理想的と考える、年長までの学習開始からは、すでに何年も経ち、いわゆる、臨界期も過ぎていく。歌やチャンツは、年齢が上がると、やりたがらない子も出てくる。クラスの趣向を考慮し、効果的でないと思われる場合には、代わりに、CDつき絵本から、たくさん英語の音とリズムを入れる。

dyslexic な子どもの場合には、アルファベット 1 文字 1 音の定着に、年齢的に予定していたよりも、多くの時間がかかることがある。学校でローマ字を習うと、アルファベットは定着するが、今度は、f 音を h で綴る、子音に必ず母音をつける (e.g. desku) ようになり、ローマ字は日本語だ、英語とは違う、と、また、1 文字 1 音、3 文字単語、magic E と、復習が必要になる。

妹の場合には、1 文字 1 音が定着してから、

学校でのローマ字学習に入れるので、混同が
少ない、あるいは、違いに気づけるようになる。
姉は、中学生になると、スペリングで苦
労することが予想される。英語の音のインプ
ットならびに、リズムよく音読する練習が、
徹底できていないために、読みに時間がかか
ったり、5文字以上くらいになると、読み方
が難しいと感じ、間違えた読みをする自覚が
あるため、カタカナに頼ろうとすることもあ
る。

ところが、学習開始が、たとえ、高学年生
になっただけでも、英語らしいリズムの習
得、きれいな発音、文字の認識が1年足らず
でできる子どももいる。実際、5年生での入
学であったが、面接をしたときに、学習能力
が非常に高いと思われたので、学習歴の長い
子どもといっしょに始めたところ、すぐに遜
色なくできるようになった子がいた。

dyslexic な子どもの場合は、そうでない子に比
べ、文字関連の学習に時間がかかる。よっ

て、できれば、幼児期から時間をかけて取り組めば、中学入学までに、「英語が得意」と言えるまでに道筋をつけてあげられるのではないかと思う。

先に、Thursday の th の習得に関して述べた子どもでもあるが、3歳から、歌と絵本を中心にレッスンをし、その際に、教師が、アルファベットポスターや絵本の文字のところを指で押さえ示したり、絵だけでなく、文字がいっしょに書いてあるカードを活動に使っている。と、1文字1音のフォニックスを始める前の、4歳ごろから、文字と音の関係に自ら気づき始めた。

車中から見える看板の英語を、まずは、アルファベットの名前読みを、F-O-X のようにするところから始まり、すぐにそれを fox と読めるようになった。

この子どもは、大変耳が良く、教師が彼女の名前を呼ぶ英語的なイントネーションと、親が呼ぶ日本語のイントネーションが違うこ

とを、習い始めたすぐの頃に、指摘したこともあった。この子は dyslexic ではないが、dyslexic な子どもにおいても、こうして、耳を鍛えることは大変重要であり、幼児期に不可欠であると思われる。

また、この子は、お気に入りの本の読み聞かせを繰り返しているうちに、動物の名前や、good などの頻出単語が自然に読めるようになった。dyslexic な子どもでも、ストーリーをよく理解でき、話のオチに笑ったりできる子であれば、いろいろと読み聞かせる中から、お気に入りの本を見つけてやり、数語のキーワードを強調して見せ、印象付けてやれば、文字に苦手意識を持つようになる年齢以前に、「英語が読める！」という感動を与えてあげられるのではないか。それには、相当な時間を覚悟しなければいけないが、幼児期から英語学習を始めることの意義は、この傾向の子どもたちにおいて、明らかである。

8. 今後の展望

dyslexiaの周知、支援に関わる人たちの努力により、日本でも、教科書を音声に転換する装置(DAISY)の導入が検討されているとも聞く。しかし、アメリカなどでは、大学の試験で、筆記だけでなく、同じ内容の問題を口頭による試験でも受けられる制度があることと比べても、教育現場における、読み書き困難の子どもたちへのサポート態勢は不十分であると言わざるを得ない。

あるテレビ番組で、文科省と、ゲーム制作会社が協力して、「子どもに興味を持ってもらえる」教科書作りをしました、と、非常にカラフルな、小学生の理科の教科書を紹介していた。見開き2ページとも、多色づかいで、イラストがふんだんに使われているその教科書を見ていて、dyslexiaの子どもには、かえって見づらいのではないかと感じた。彼らには、それぞれに、読みやすい文字の色があ

り、適度な空白も必要なのである。おそらく、dyslexiaでない子どもでも、どこをどう見たらよいかわからないのではないかと、思われた。「子どもが振り向いてくれる教科書」＝「絵がいっぱいで漫画みたいな教科書」なのだろうか。

見た目の豪華さではなくて、何を、どれくらい、だれに教えるかの中味をもっと吟味するべきではないか。例えば、「このユニットで習うべき、基本的なことは、この5ページです。みんなで作らしましょう。もっとやりたい子には、次の3ページもあります。自習するか、わからないところがあれば、先生に聞きに来てください。(あるいは、特別授業でやります)」というように、教科書の内容を、基本、応用、とか、レベル1、2というように分け、すべてを収録したものを与えれば、できる子も飽きず、dyslexiaのように、学習に時間のかかる子にも、これだけできればいい、と言ってあげられるのではないかと。

そう遠くない将来、各教室への電子黒板の導入、生徒各自が一台ずつPCを持ち、教師のPCとつないで授業を行う、というような時代になるそうである。dyslexicな子どもは、文字を書くよりも、パソコンに入力する方が得意な傾向がある。教室のIT化は、基本的には歓迎できるが、教科書と同じく、visualizationの方法には、各個人への気配りをして欲しい。

また、子どもたちの中には、dyslexiaだけでなく、様々な特徴を持った子がいる。以前、小学校の先生に、dyslexiaの話をしたら、「ああ、国語のLDね」と言われた。LD=learning disorder、あるいは、learning disabilityということなのであるが、私は、learning differencesと言いたい。

ADHD(attention deficit hyperactivity disorder — 注意欠陥多動性障害)、アスペルガー症候群(自閉症スペクトラムの一つで、主に、対人関係に問題があるが、知的障害はない)、発達性協調性運動障害(何もないところで転ぶ、ボールをうまく受けられない、自転車に乗れない、など、

別の動作をひとつにまとめて行うときに、困難がある) など、dyslexia以外にも、様々な特徴(differences)を持った子どもたちがいる。私たち大人の中にも、こうした特徴があつたり、子どものときにそうであつた、と思ひあつたり、あるいは、ひどい音痴だ、とか、おそろしく料理が下手だ、とか、カメのように走るのが遅い、とか、日常生活に支障を来たさない程度の特徴がある人は多いのではないか。

特徴が顕著で、レッスンの進行に問題が出るほどであれば、その子どもには、プライベートで対応するなどの措置をとるべきであるし、特に、中学生になると、学校の成績、受験への対処が問題になってくるので、同学年でも、人数が少なくても、クラス分けをすることが必要である。

しかし、小学生までのクラスにおいては、できるだけ、多様性を認め合えるようなクラス作りをしていきたい。英語活動は、何かひとつ苦手なことがあつても、他に、その子が

輝ける時間を作ってあげられるものだと思います。
歌が得意な子もいれば、ゲーム感覚に長けている子、発表する度胸だけはだれにも負けない子、など、だれでも、何か自信を持つてできるところがある。また、読み書き活動を通して、dyslexic な子どもだけでなく、落ち着きのない子、おしゃべりがやめられない子も、集中できる時間を、1分、5分、と伸ばしてあげられる。英語教室が、将来、広い世界へ出ていく子どもたちを育てる場所であること、全人教育であることを再認識したいものである。

おわりに

私自身は、小さい頃から、本が好きで、漢字や英単語は、書いて練習しなくても、一度見て、読み方を聞けば、綴りを記憶できる子どもであった。フォニックスのルールを習わなくても、英語を習い始めた小学6年生のと

きに、中学の教科書を見て、先生が読むのを聞いてみると、だんだん、読み方の決まりがわかり、初見の語でも自分で読めるようになっていた。

dyslexiaの「不思議」に興味を持つきっかけは、まさに、「どうして読めないの?」「なんでたった3文字の単語が書けないの?」というwhy?の答を見つけたいからであった。

医師でもなく、言語聴覚士でもない、民間の小さな英語教室の一教師として、縁あって、めぐり会った子どもたちに、何か、自分にできること、自分だからできることがあるのではないか、と思っている。今後も、日々のレッスンの中で、子どもたちとそれを探していきたい。

参 考 文 献

Margaret Snowing : Dyslexia

Sally Shaywitz, M.D. : Overcoming Dyslexia

Cynthia M. Stowe, M.Ed. : How to reach & teach children & teens with Dyslexia

Gavin Reid and Shannon Green : 100 ideas for supporting pupils with Dyslexia

藤 堂 栄 子 : デ ィ ス レ ク シ ア で も 大 丈 夫 ー

読 み 書 き の 困 難 と ス テ キ な 可 能 性

品 川 裕 香 : 怠 け て な ん か な い ! 2